

## 第四章 貨幣の起源と役割

分業が確立すると、自分の生産物だけで満たせる欲求はごく一部にとどまり、人は自家消費を超える余剰を必要な他人の産物と取り替えて不足分の大半を補う。こうして皆が交換に生計を依存し、いわば誰もが少なからず商人となり、社会全体も本来の意味での商業社会へと成長する。

しかし分業の初期には、交換がしばしば行き詰まった。ある人に余剰があり別の人に不足があっても、後者が前者の欲しい物を持っていなければ取引は成立しない。たとえば肉屋に肉の余りがあり、醸造家とパン職人はそれを買いたい、差し出せるのはビールとパンだけで、肉屋は当座の分をすでに確保している。この場合、肉屋は売り手になれず、彼らも顧客になれず、互いに役立ち合えない。そこでこの不便を避けるため、分業が成り立ったどの社会でも、慎重な人は自分の産物とは別に、多くの人が交換を受け入れやすい種類の物資を、いつも一定量手元に備えるようになった。

交換の媒介としては、時代ごとに多様な品が考案され実際に使われてきた。社会の素朴期には家畜が一般の取引手段とされ、扱いにくいながらも古代には価値を家畜の頭数

で表す例が見られる。ホメロスは、ディオメデスの甲冑は牛九頭、グラウコスの甲冑は百頭の値だと記す。アビシニア（エチオピア）では塩、インド沿岸の一部では貝殻、ニユーファンドランドでは干しタラ、ヴァージニアではタバコ、西インド諸植民地の一部では砂糖、ほかの国々では生皮やなめし革が共通手段として用いられたという。今日でもスコットランドのある村では、職人がパン屋やエール酒場で金の代わりに釘で支払うことがあるという。

それでも結局、どの国でも交換の手段として金属が他の財より選ばれたのは、理由が明白である。金属はほとんど劣化せず保管損失が小さく、溶かしても価値を失わずに自由に細分・再結合できる。この性質は同等の耐久性をもつ他の商品には乏しく、金属を商取引と流通の媒体として最適にする。たとえば塩を買うのに家畜しか差し出せない人は、家畜を割るわけにいかないため、牛や羊一頭分に見合う塩を一度に買うしかなく、少量の購入は難しい。さらに多く欲しければ、二頭分、三頭分へと増やすほかない。他方、対価が金属であれば、必要な塩の量に正確に見合うだけの金属を容易に支払える。

この目的に使う金属は国ごとに異なり、古代スパルタは鉄、古代ローマは銅、富裕で商業の発達した国々では金と銀が一般的な取引手段だった。

### 3 第四章 貨幣の起源と役割

これらの金属は当初、刻印も鑄造もない棒状のまま取引に使われていたと考えられる。ブリニウスは古代史家ティマイオスを引き、セルウィウス・トゥッリウスの時代までローマには鑄造貨がなく、無刻印の銅棒で物を買っていたと伝える。すなわち、その棒が当時の貨幣として機能した。

しかし無刻印の金属棒を貨幣代用とする方法には二つの大きな不便があった。第一に計量の手間で、貴金属は微小な差が価値を左右するため精密な分銅と天秤が不可欠であり、金の計量はとりわけ神経を使う。粗金属であっても、ファージングのような極小額の取引のたびに秤にかけるのは煩わしい。第二に品位鑑定の難しさで、るつぼで一部を溶かし適切な薬剤で試さない限り結果は当てにならない。鑄貨制度以前には、純銀や純銅一ポンドのつもりが外見だけ本物らしい粗悪合金をつかまされる危険が常にあった。

こうした濫用を防ぎ交換を円滑化して産業・商業を促進するため、進歩した各国はいずれも流通用の特定金属の一定量に公的刻印（公印）を施す道を選び、これが鑄貨と造幣局の起源となった。その性格は、毛織・麻織物の検尺官や検印官の制度と同様に、市場に出る品の数量と品質の均一性を公印で保証する仕組みである。

流通金属に最初に付された公印は、多くの場合、判定が最も難しくしかも最重要な地

金の品位を示すためのもので、銀器や銀延べのスターリング刻印や金インゴットに見られるスペイン刻印に近かった。印は片面だけの打刻で、品位は示しても重量は保証しない。聖書にはアブラハムがマクベラの畑の代価として銀四百シェケルをエフロンに「量って」渡したとあり、商人の通用貨と呼ばれながらも枚数ではなく重量で受け渡しされたことがわかる。さらに、英サクソン時代には王家の歳入は現物納が通例で、征服王ウィリアムが貨幣納を導入した後も、王室会計所では長く枚数ではなく重量で受領された。金属を正確に量るのは不便で難しかったため、貨幣鑄造という制度が生まれた。表裏、場合によっては縁まで刻印を施せば、品位だけでなく重量も保証できると考えられ、その結果、これらの貨幣は今日と同様、秤にかけず枚数で通用するようになった。

貨幣名は本来、その中身の金属の重さを示していた。ローマでは、最初に貨幣を鑄造したセルウィウス・トゥッリウスの時代、アスは良質の銅一ローマ・ポンドに等しく、ローマ・ポンドはトロイ衡と同じ十二オンス建てで、一分は実際に銅一オンスだった。イングランドではエドワード一世の頃、ポンド・スターリングに既知の品位の銀一タワール・ポンドが含まれ、タワール・ポンドはローマ・ポンドより重くトロイ・ポンドより軽かった。英造幣局がトロイ衡を採用したのはヘンリー八世治世一八年である。フランス

のリーヴルはシャルルマーニュ時代に既知の品位の銀一トロイ・ポンドを含み、当時シヤンパーニュのトロワの大市の度量衡は欧州で広く尊重された。スコットランドの貨幣ポンドも、アレグザンダー一世からロバート・ブルースに至るまで、英ポンド・スターリングと同じ重さ・品位の銀一ポンドを含んでいた。英・仏・スコットの各ペニーも当初は銀一ペニーウエイト（一オンスの二十分の一＝一ポンドの二百四十分の一）を實際に含み、シリングもまた本来は重量単位だった。ヘンリー三世の古法は「小麦がクォーター十二シリングのとき、白パン（ワステル）一ファージングの重さは十一シリング四ペンスとすべし」と定めている。ただし、シリングがペニーやポンドに対してとる比率は、ペニーとポンドの関係ほど一定ではなかった。フランス最初の王統期にはスー（シリング）が五・十二・二十・四十ペニーとまちまちで、古代サクソンでも一時は五ペニーにすぎず、フランク人同様に変動したと考えられる。やがてフランスではシャルルマーニュ以降、イングランドではウィリアム征服王以降、ポンド・シリング・ペニーの名目比は今日と同様に固定されたが、各単位の実質価値は大きく変わった。どの国でも為政者が臣民の信頼を濫用し、貨幣に含まれる金属量を段階的に減らしてきたからである。ローマのアスは共和政末には元の二十四分の一（一ポンドが半オンス）へ、英ポンドと

ペニーは元の約三分の一へ、スコットランドは約三十六分の一へ、フランスは約六十六分の一へと落ち込んでいた。こうして国家は名目上は少ない銀で債務や約束を履行できたが、実質的には債権者の正当な取り分を削ったに等しく、しかも一般の債務者にも同じ便法が許され、旧貨で負った負債を新しい劣悪貨で同額名目のまま返せた。結果として、この種の操作は常に債務者に有利・債権者に不利に働き、ときに大きな公的災厄に勝る規模で私財の入れ替わりをもたらした。

こうして貨幣は、すべての文明国で商業の共通の媒体となり、その仲介によって、あらゆる財の売買や交換が行われる。

では、人々が財をお金と引き換えたり、財同士を交換したりするときに自ずと従う規範は何か。これからそれを確かめる。こうした規範が、いわゆる財の相対価値（交換価値）を決める。

価値という言葉には二つの意味がある。対象そのものの有用性と、その所有によって他の財を手に入れられる力で、前者を使用価値、後者を交換価値という。しかも、使用価値が非常に大きいもののほど交換価値は乏しく、逆も起こる。水はきわめて有用だがほとんど何も買えず、反対にダイヤモンドは実用性に乏しいのに多くの財と引き換えにな

りうる。

諸商品の交換価値を決める法則を確かめるため、次の点を明らかにする。

第一に、交換価値の真の尺度は何か。すなわち、すべての商品の実価格は何によって成り立つのか。

第二に、この実価格はどの要素から成るのか。その内訳は何か。

そして最後に、価格の各部分が自然（通常）の水準から上にも下にも振れるのはなぜか。換言すれば、市場価格（実際の価格）が自然価格と一致しないのはなぜか。

続く三章でこれら三つの主題を、できる限り丁寧かつ明確に論じる。そのため、読者には「忍耐」と「注意」をお願いしたい。忍耐は、ときに冗長に見える細部まで目を通していただくためであり、注意は、最善を尽くしてもなお曖昧に感じられる箇所を理解していただくためである。明快さを優先するためなら退屈と見なされる危険もいとわないが、題材が本質的に高度に抽象的である以上、多少の不明瞭さが残り得ることも付け加えておく。